八幡川周辺の秋

秋の七草

フジバカマ【サワヒヨドリ】（キク科）

ハギ【マルバハギ】（マメ科）

クズ（マメ科）

昔ならごく身近な秋の草花ですが、今では7種すべてをみつけるのは難しいようです。特に、フジバカマは八幡川流域では発見にいたっていないことから写真は近似種のサワヒヨドリを掲載しました。最初に登場するハギは、唯一、草花ではなく木の花です。また、万葉集で最も多く詠まれた花でもあります。春の七草は、花の美しさというより風習的な要素や薬膳の効果を前面に出していますが、秋の七草は、愛でて楽しめるものが多いようです。しかし万葉の当時は、生活に密着した実用的な植物でもありました。たとえば、ススキの茎や葉は屋根を葺く材料、クズの根は薬用やくず粉、ナデシコやオミナエシも根は薬用、葉は食用となり、フジバカマも薬用のほかに、香料として利用されました。歌中のアサガオは桔梗（ききょう）であるといわれていますが、やはり根は薬用とされました。昔の人の、心の豊かさと、自然とうまくつきあってきたことを私たちも見習いたいものです。

古くは万葉集に、『秋の野に咲きたる花を指折りかき数ふれば七草の花。萩の花、尾花、葛花、撫子の花、女郎花また藤袴、朝顔の花』(山上憶良)と詠まれました。

オバナ=ススキ（イネ科）

カワラナデシコ（ナデシコ科）

オミナエシ（オミナエシ科）

アサガオ=キキョウ（キキョウ科）

白露の頃から、秋の花たちが目立つようになります。
秋の花は繊細で穏やかな表情を持ち、
気品が漂っています。

ヒガンバナ（ヒガンバナ科）

秋の彼岸の頃、田の畦道や土手などにつぼみをつけた茎が土中から伸び、真っ赤な花を咲かせます。別名マンジュシャゲともいい、有毒植物です。

日当たりのよい道端や草むらで、ほかの植物にからみつくつる性の半低木です。白い花びらに見えるのは、がくです。ボタンヅルに酷似しますが本種は葉に切れ込みがないことで区別できます。茎や葉にかぶれを起こす有毒物質を含むので汁がつかないよう注意しましょう。

センニンソウ（キンポウゲ科）

ボタンヅル（キンポウゲ科）

林縁や低木などに生育しているつる性植物です。低木や亜高木程度の高さまで登ることができ、花は8～9月に咲きます。花びらに見えるのはガクで、白やわずかに黄色みを帯びています。葉には切れこみがあり、ボタンに似ています。

山野の木陰に生える30～90cmの多年草です。花期は8～10月で長さ1.7～2cmで青紫色の細長い花をつけ、先はくちびる形をしています。

アキチョウジ（シソ科）

イヌコウジュ（シソ科）

山野の道端などに見られる高さ20～60cmの1年草で、全体に細かい毛があり、茎は4角形をしています。葉にはごく浅いぎざぎざがあり、淡紅紫色の花を多数つけます。

山野の草地や林の縁などで見られる高さ40～100cmの多年草です。茎は四角形で、葉は広卵形で縁に粗いぎざぎざがあります。9～10月、青紫色の小さなくちびる状の花が細長い穂になって多数つきます。

ヤマハッカ（シソ科）

道端や河川敷に普通に見られる高さ30～40cmの1年草です。赤紫色の小さな花穂の集団が目を引きます。赤紫の花のように見えるのはガクです。食用にするのは辛い味のヤナギタデで、本種は同じ仲間でも辛くないため役に立たないという意味で、イヌという名がつけられました。

池沼、川岸などに普通に生える高さ2～3mの大形の多年草です。地下茎は長く土中をはい、大群生をつくります。水の浄化作用や水生生物のすみかや産卵場所になります。アシは「悪し」に通ずるのでヨシ「良し」と呼ばれます。

低地～丘陵地の原野、道端などに見られる高さ50～150cmの多年草です。花は7～10月頃見られ、黄色い花が穂になって並ぶので、これを金色の水引き（のし袋に使用）に見立てて、この名がつきました。

山野や道端に普通に見られる高さ30～50cmの多年草です。 花は7～10月に咲き、色は白から赤色と一様ではありません。花は5弁で赤い筋があり、二つ並んで咲きます。健胃整腸剤として日本の薬草の代表格といえます。

セイタカアワダチソウ（キク科）

秋はキク科の植物が多く見られます。中でもひときわ目につくのが、北アメリカ原産の帰化植物のセイタカアワダチソウです。繁殖力には目を見張るものがあり地下の茎からほかの植物の成長を妨げる物質を出して二面にはびこります。

●●●
山野の日当たりのよい道端の法面や伐採地、崩壊地などに見られ、高さ30～120cmになります。安定した土壌では見られません。タケニグサといっしょに生えていることが多く、茎は切ると白い乳液を出します。下部の葉は柄がありますが上部の葉は柄がなく茎を抱くようにつきます。頭花は直径15mmほどで10個程度の舌状の花を8～11月に咲かせます。日が射さないと花を開かず、咲き終わると下を向きます。

ヤクシソウ（キク科）

●●●
北アメリカ原産の帰化植物で、幕末の頃に渡来しました。根に芋ができ、戦時中は飼料や食料として栽培されました。高さは2m程度になり、茎葉には粗い毛があります。9～10月頃に花が咲き、花が菊に似ていて地下に芋を作るのでこの名がつきました。

キクイモ（キク科）

アキノキリンソウ（キク科）

●●
山地や丘陵の日当たりのよい場所に生える高さ30～80cmの多年草です。ベンケイソウ科のキリンソウに似ていて、秋に咲くことからアキノキリンソウと名づけられました。花は8～11月。花が密集してつくので別名アワダチソウの名もあります。

ヨメナ（キク科）

●●
田の畦など、やや湿ったところに生える高さ50～120cmの多年草です。一般にいう野菊で、薄紫色の花を咲かせます。よく似たものにノコンギクがあります。花を割ってみて冠毛がごく短いのがヨメナです。どちらも若葉を摘んで食用にしていました。

●●●
木陰などの直射日光の当たらない所を好む、高さ30～80cmの多年草です。10月頃に可憐な黄色い花を咲かせます。古くから庭の下草として植えられています。葉がツヤツヤと光っていることからツヤブキ、転じてツワブキの名になりました。

ツワブキ（キク科）

色づく木々たちの秋

八幡川植物ガイドブック

秋も深まり、最低気温が摂氏7～8℃以下になる日が
しばらく続くと、紅葉が始まります。
まず最初にウルシ科の植物から色づき
秋の深まりとともにブナやカエデの仲間へと
紅葉が進んでいきます。

実りの秋

植物の果実は、われわれ人間の食料や生活用品として利用されてきました。また、動物や昆虫たちのえさにもなりました。

サネカズラ（モクレン科）

サンカクヅル（ブドウ科）

山野に生える落葉高木。
果実からロウをとりました。

ハゼノキ（ウルシ科）

どんぐりの仲間

クヌギ（ブナ科）

コナラ（ブナ科）

スダジイ（ブナ科）

クリ（ブナ科）

イチョウ（イチョウ科）

コナラ（ブナ科）

ガマズミ（スイカズラ科）

樹木の紅黄葉の美しさは格別です。イチョウが黄色くなる仕組みは、気温の低下とともに葉緑素がこわれて緑色が消えると、葉にもともとあった「カロチノイド」という黄色い色素が目立ってくるためで、カエデ類の葉が赤くなるのは水や養分の通る管が閉じられると葉の葉緑素で作っている糖分が葉にたまり、この糖分と太陽の光で、「アントシアン」という赤い色素が作られて、葉を赤く染めるからです。

八幡川周辺の冬

八幡川
城跡
ガイドブック

スギ(ヒノキ科)

落葉樹が葉を落としてもスギは青々とした葉のまま雪の中、春先に向けて花芽を準備していました。スギは同じ株に雄花と雌花をつけます。花粉症の原因になるのは、この写真の雄花です。大量のスギ花粉が発生するのは、密にスギを植林していることにも原因があります。

針葉樹の王様格は常緑高木のヒノキです。材は高級木材として扱われ、木肌、耐久性とも申し分ありません。法隆寺の五重塔がこの木で建造されていることは有名です。写真は実(球果)で、花はスギより遅く3～5月に咲きます。

ヒノキ(ヒノキ科)

晴れ渡った冬の澄空を見上げると、木に絡みついたつる性の落葉低木のツルウメモドキの実が見事に開いています。晩秋に開き始める実は、冬になっても枝いっぱいに赤と黄のコントラストの鮮やかさを保っています。

ツルウメモドキ(ニシキギ科)

カナメモチ(バラ科)

暖地の丘や低山に生える常緑の小高木です。葉は光沢があります。5～6月ごろ、枝先に白い小さな花が集まって咲きます。果実は晩秋に赤く熟し、冬まで残ります。春の新葉が赤くて美しいのでアカメモチともいわれ、生け垣として利用されています。

山地の林縁のやや湿ったところに生える常緑小低木で、葉の裏面にはびっしりと短い毛が生えています。花が少ない時期だけに、この赤い実はよく目立ち、晩秋から翌年の早春まで美味しい果実を楽しませてくれます。果実が冬に赤く熟すところからこの名がついています。

フユイチゴ(バラ科)

ヒヨドリジョウゴ（ナス科）

明るい山野に自生するつる性の多年草です。花は8～9月頃、白い小さな花をつけますが、果実の方が赤くよく目立ちます。ヒヨドリが好んで食べることからこの名がつけられましたが、本種は有毒なので決して食べてはいけません。

ヤブコウジ（ヤブコウジ科）

林の中に生育する小低木です。高さは10～15cmほどですが立派な木の仲間です。花は7～8月頃に咲き、果実は晩秋に赤く熟し、冬まで残っています。正月の飾りとして使われます。

スイカズラ（スイカズラ科）

山地、丘陵地に普通に見られるつる性の常緑低木です。長卵形で密毛が生えた葉を、冬でも枯らさずに残しています。冬の寒さに耐え忍ぶということから、「忍冬（にんどう）」の名がつけられました。この葉や茎を乾燥させると漢方薬になります。

タンポポやタネツケバナは、寒く日照時間の短い冬は効率よく太陽の光を浴びるため、ロゼット状に葉を広げています。こうすることにより、寒い北風を受けても茎がぐらつくことはありません。

セイヨウタンポポ（キク科）

タネツケバナ（アブラナ科）

ウメといえば、日本的なイメージがありますが、中国原産の落葉中木です。八幡川流域の畑や野山によく植えられています。花は1～3月に葉の芽吹きより先に良い香りのする花を咲かせ、春の訪れを教えてくれます。果実は梅干しや梅酒にします。

ウメ（バラ科）

八幡川の山手の斜面でよく見かける常緑高木です。花は12月～5月に赤い花をつけます。メジロなどが密を吸いに来て、受粉します。昔は、この種子から椿油をとっていました。

ヤブツバキ（ツバキ科）

おわりに

現在、広島市には約2,000種の種子植物が確認されています。その中には環境の変化に伴って絶滅が危惧されている植物も幾つかあります。

植物は動物と違い、環境が変化したからといって、よい環境を求めて移動するわけにはいきません。新たな環境に対して、適応力のあるものだけが生き残れるのです。このような弱い立場にある植物の極生変化は、私たちに環境が変化したことを知らせるバロメーターにほかなりません。八幡川が育んだ豊かで美しい自然を守ることは私たちの責任でもあります。

現在、八幡川で確認されている植物が、将来も絶えることなく、私たちにやさしく微笑みかけてくれることを願っています。